

第43回 宮崎整形外科懇話会 プログラム

日時：平成13年12月15日（土）13：40開会

会場：宮崎観光ホテル 尾鈴の間（西館8階）

☎880-8512 宮崎市松山1-1-1 ☎0985-27-1212

会長：田島直也

宮崎医科大学整形外科学教室

共催 宮崎整形外科懇話会
住友製薬株式会社

参加者へのお知らせ

13:00～受付

1. 参加費；会場受付で申し受けます。 1,000円
2. 年会費；未納の方は受付で納入お願いします。 5,000円

演者へのお知らせ

1. 口演時間；一般演題・1題6分、討論3分
；主 題・1題6分、一括討論とします。
2. 口演用スライド；単写とします。演者は講演30分前までにスライド受付に御提出下さい。

世話人会のお知らせ

13:00～13:30 綾の間（西館1階）

特別講演のお知らせ

特別講演Ⅰ 15:45～16:45

『開放性骨折の治療 一創外固定法と最新治療について』

日本医科大学高度救命救急センター助教授 川井 真 先生

特別講演Ⅱ 16:50～17:50

『大腿骨頸部骨折をめぐる最近の話題』

近畿大学医学部整形外科教授 浜西千秋 先生

註 上記講演は、日本整形外科学会教育研修会（1単位）にそれぞれ認定されておりますので御参加下さい。

なお、受講料は1,000円です。

事務局

〒889-1692 宮崎郡清武町大字木原 5200

宮崎医科大学整形外科学教室内 担当 園田典生

TEL 0985-85-0986（直通） FAX 0985-84-2931

13:40 開 会

13:40~14:20 一般演題 座長 川越正一

1. Tendon gliding surfaceとしてのtemporal fascial flapの有用性について
宮崎社会保険病院 形成外科 藤林久輝、ほか
2. 尺骨突き上げ症候群に対する尺骨短縮術の治療成績
県立宮崎病院 整形外科 後藤英一、ほか
3. 股関節中心性脱臼を伴った骨盤骨折の治療経験
県立宮崎病院 整形外科 永吉徹郎、ほか
4. インターネットホームページを利用した症例検討について
あかえ整形外科医院 黒木隆男、ほか

14:25~15:40 主題：開放骨折 座長 帖佐悦男、神蘭 豊

5. 当科における下肢開放骨折の発生頻度と治療経過
球磨郡公立多良木病院 整形外科 浪平辰州、ほか
6. 当院における開放骨折（Gustilo typeⅢB）の治療経験
県立延岡病院 整形外科 公文崇詞、ほか
7. 治療に難渋した下腿開放骨折の1例
県立延岡病院 整形外科 田口 学、ほか
8. 開放骨折における軟部組織の治療
県立日南病院 整形外科 川添浩史、ほか
9. 開放骨折の治療法の検討 一下肢、特に脛骨髄内釘を中心に一
宮崎医科大学 整形外科 村上恵美、ほか
10. 開放骨折に対する初期治療の現況
県立宮崎病院 整形外科 有蘭 剛、ほか

15:45~16:45 特別講演Ⅰ 座長 税所幸一郎

『開放性骨折の治療 一創外固定法と最新治療について一』

日本医科大学高度救命救急センター助教授 川井 真 先生

16:50~17:50 特別講演Ⅱ 座長 田島直也

『大腿骨頸部骨折をめぐる最近の話題』

近畿大学医学部整形外科教授 浜西千秋 先生

開 会 (1 3 : 4 0)

一般演題 (1 3 : 4 0 ~ 1 4 : 2 0)

座長 川越正一

1. Tendon gliding surface としての temporal fascial flap の有用性について

宮崎社会保険病院 形成外科
同 整形外科

○藤林 久輝 横内 哲博
田辺 龍樹

関節部における腱の露出はその表面が血行に乏しく、可動部位であり安静が保てないことから植皮の生着が難しく、また術後の癒着により関節拘縮を起こすなどの多くの問題がありその再建が難しいとされている。今回我々は蜂窩織炎に続発した足関節部における前脛骨筋腱の露出を認めた80歳の男性に対して、その足関節の機能を温存させるべく血管柄付きtemporal fascial flapの遊離移植を行い、その滑走能としての十分な効果が得られたので若干の文献的考察を加えて報告する。

2. 尺骨突き上げ症候群に対する尺骨短縮術の治療成績

県立宮崎病院 整形外科

○後藤 英一 高妻 正和 有菌 剛
阿久根広宣 徳久 俊雄 小林 邦雄

【目的】手関節尺側部の疼痛の原因として主要な疾患のひとつに尺骨突き上げ症候群があげられる。これらの症例に対し尺骨短縮術を施行し良好な成績が得られたので、文献的考察を加え報告する。

【対象および方法】1997~2001年の期間に尺骨突き上げ症候群と診断された男性6例、女性1例に対し尺骨短縮術を施行し、術前後の臨床症状および身体所見の比較とX線学的評価を行った。

【結果および考察】6例で臨床症状の改善を認め、術後の骨癒合も良好であった。三角繊維軟骨複合体 (TFCC) の損傷を伴っていた一例にのみ症状の残存を認めた。本法は尺骨突き上げ症候群に対し有効であると考えられた。

3. 股関節中心性脱臼を伴った骨盤骨折の治療経験

県立宮崎病院 整形外科

○永吉 徹郎 阿久根広宣 徳久 俊雄
寺原 幹雄 後藤 英一 喜多 正孝
有蘭 剛 高妻 雅和 小林 邦雄

【はじめに】中心性脱臼を伴った外傷性骨盤骨折の1症例を経験したので、報告する。

【症例】22才男性。1998年3月8日、高所から転落し受傷。X線上、転位のある股関節中心性脱臼を伴った骨盤骨折を認めた。腹部CT上、左後腹膜に著明な血腫があり、出血性ショックを認めたため、全身管理を行った。同時に脛骨より鋼線牽引5kgを行い、大転子部にcanulated screwを刺入し、側方への2kgの直達牽引を併用した。受傷後11日にRibbon plate及びscrewを用いた観血的整復固定術を施行した。術後5週で免荷起立訓練を開始し、10週で全荷重歩行を開始した。術後4年経過した現在、疼痛、可動域制限なく、ADL上全く障害を認めていない。

【考察】寛骨臼の転位を伴った股関節中心性脱臼は、牽引による整復が困難な場合が多く、観血的整復固定術が必要な例が多い。可能な限り解剖学的な位置に整復固定し、骨頭の求心性を良好に保つ必要がある。また、時間の経過とともに整復が難しくなるため、全身状態が安定したら可及的速やかに（3週間以内）観血的整復固定術を行うことが必要と思われた。

4. インターネットホームページを利用した症例検討について

O.M.M.2000

あかえ整形外科医院
潤和会記念病院 整形外科
橘病院 整形外科
獅子目整形外科病院
宮崎医科大学 整形外科

○黒木 隆男
甲斐 睦章
柏木 輝行
黒田 宏
田島 直也

日常診療では、診断や治療に悩んだり、他の意見を求めたくなったりする時が少なからずある。自分で論文や書籍を調べることは大事なことであるが、どうしても判断できないこともある。大学などで定期的に症例検討会が行われているが、実診療に反映させるには即時性に欠ける。そこで我々は、率直なディスカッションを目的に、西暦2000年よりOrthopedic Meeting Miyazaki (O.M.M.)2000と称して症例検討会をおこなってきた。それでも、一堂に会しての症例検討会では時間的な制約があり、外傷症例ではそのタイミングを逸してしまう。E-Mailのやりとりでは多くの人の意見を参考にすることができず、一方向性の情報になったり、返事を送るのに手間を取ったりで、うまく行かない。そこで、リアルタイムに症例検討ができる場としてホームページ上に掲示板形式の症例検討会を開設した。現在は試行段階ではあるが、その有効性と問題点に関して検討し報告する。

主題：開放骨折（14：25～15：40） 座長 帖佐悦男
神菌 豊

5. 当科における下肢開放骨折の発生頻度と治療経過

球磨郡公立多良木病院 整形外科 ○浪平 辰州 江夏 剛

当科で最近5年間に下肢の骨折に対する手術を407例施行し、そのうち開放骨折が19例、4.6%を占めていた。部位別には大腿骨骨幹部1例、遠位1例、脛骨骨幹部10例、脛骨遠位1例、他は足趾で脛骨骨幹部の開放骨折の頻度が最も高かった。平均年齢は57.6才、平均観察期間は32.2ヶ月、平均骨癒合期間は5.6ヶ月であった。Gustilo分類ではタイプI 7例、タイプII 7例、タイプIII A 2例、タイプIII B 3例であった。術後の感染は3例に起こったが数回のデブリドマン、持続洗浄、セメントピース等で鎮静化した。

6. 当院における開放骨折（Gustilo type III B）の治療経験

県立延岡病院 整形外科 ○公文 崇詞 田口 学 木屋 博昭
弓削 孝雄 藤本 徹 西里 徳重

【はじめに】 骨折治療や感染対策の進歩にもかかわらず、開放骨折の治療にはいまだ重大な外科的問題を残している。今回当科における過去5年間の本骨折の治療結果を若干の文献的考察を加え報告する。

【対象】 1996年1月から2001年9月の間、当科にて加療を行った開放骨折140例のうち下腿のGustilo type III B開放骨折8例を対象とした。

【結果】 全例、当日洗浄・デブリドマン後創外固定とし、1例を除き後日内固定を追加した。全例に骨癒合認めた。1例に深部感染を認めた。

7. 治療に難渋した下腿開放骨折の1例

県立延岡病院 整形外科

○田口 学 木屋 博昭 弓削 孝雄
藤本 徹 西里 徳重 公文 崇詞
東 高弘

日之影町国民健康保険病院

【はじめに】開放骨折の治療は近年著しい進歩をみせているが、強大な外力による広範な軟部組織損傷を伴うGustilo TypeⅢB開放骨折には治療に難渋するものがある。

今回われわれは皮膚壊死からMRSA骨髓炎を生じた症例に対し遊離血管柄付腓骨付皮弁にての加療を経験したので文献的考察を加えこれを報告する。

【症例】64才 女性。

【現病歴】平成11年11月14日交通事故にて受傷。左大腿骨顆上部開放骨折（Gustilo TypeⅢA）、左下腿骨分節開放骨折（Gustilo TypeⅢB）、左第1, 2, 5中足骨骨折を認めた。

【経過】同日、洗浄・デブリードマンの後、下腿は創外固定とした。大腿は直達牽引を行った後12月6日骨接合術を施行した。下腿は近位部に皮膚壊死を認めこれからMRSA骨髓炎生じたため、平成12年2月14日約5cmにわたり脛骨を切除した。感染の鎮静を待って4月24日健側からの遊離血管柄付腓骨付皮弁術を施行した。皮弁は良好に生着し骨癒合も良好であった。現在脚長差是正のため装具着用しているが独歩可能である。

8. 開放骨折における軟部組織の治療

県立日南病院 整形外科

○川添 浩史 長鶴 義隆 松岡 知己
坂田 勝美

【はじめに】開放骨折における軟部組織の治療は、骨折全体の治療に置いて非常に重要である。今回当院で経験した開放骨折、とりわけ軟部組織の治療について文献的考察を加え報告する。

【対象】1997年以降の5年間に当院で治療を行った開放骨折25例。年齢は6歳から82歳、平均41.8歳である。

【結果、考察】Gustilo分類では1型7例、2型7例、3a6例、3b4例、3c1例であった。3型のうち、9例に後日植皮、筋弁等の軟部組織修復手術が行われた。いずれも下腿や足部等の軟部組織表層の損傷であり、これらの部位での開放骨折では初診時から軟部組織の治療についてあらかじめ考慮されなければならない。

9. 開放骨折の治療法の検討

-下肢、特に脛骨髄内釘を中心に-

宮崎医科大学 整形外科

○村上 恵美 帖佐 悦男 鳥取部光司
坂本 武郎 渡邊 信二 黒沢 治
大倉 俊之 勝畷 葉子 田島 直也

当院は、病院の性格上、開放骨折の初期治療のみを行い全身状態に問題がなければ転送せざるをえないことが多いため、症例数に限りがあるので、下腿開放骨折の髄内釘固定に関し文献的考察を行った。下肢開放骨折の治療法は、ゴールデンアワー内でのdebridement後創外固定器やギプスによる初期固定を行い、感染徴候や仮骨形成の状態により二期的に内固定を行っている。過去3年間に下肢の開放骨折にて来院されたのは、10名、男性8名、女性2名で年齢は、8歳から88歳であった。特に髄内釘の実施時期とリーミングの是非について文献的検討を行った。実施時期に関しては、Gustilo 分類に依存しており、リーミングの是非に関しては創外固定の種類、骨折型や合併症の有無などとの関連が報告されていた。

10. 開放骨折に対する初期治療の現況

県立宮崎病院 整形外科

○有菌 剛 小林 邦雄 徳久 俊雄
高妻 雅和 阿久根広宣 喜多 正孝
後藤 英一 永吉 徹郎 寺原 幹雄

当院では、Gustilo typeIIまでの感染の危険性が比較的少ないとされる開放骨折では、受傷当日、可及的早期に内固定材料を用いた一期的骨接合術を行い、比較的良好な成績を納めているが、昨今、primary careの方法や内固定術の時期が訴訟の争点になるなど、より一層慎重な対応を要求される状況となってきている。今回、現時点でのあるべき治療方法を検討する目的で、開放骨折に対する初期治療について記載された最近の論文から各施設での成績について検討した。対象はmedlineより検索した論文216編。これらのうち開放骨折の一期的固定の功罪に言及した論文49編から、骨軟部組織の損傷や創汚染の程度、治療の方法、成績について詳細に検討し、外傷の程度に応じた至適対応方法、取り分け一期的内固定の是非について検討した。

特別講演Ⅰ（15：45～16：45）

座長 税所幸一郎

『開放性骨折の治療 ー創外固定法と最新治療についてー』

日本医科大学高度救命救急センター助教授 川井 真 先生

特別講演Ⅱ（16：50～17：50）

座長 田島 直也

『大腿骨頸部骨折をめぐる最近の話題』

近畿大学医学部整形外科教授 浜西千秋 先生

閉 会